

草創期のフェビアン協会に関する一考察

—1887年6月「綱領」(The Basis of the
Fabian Society) 採択まで—

山 田 寿 一

目 次

序

I) 時代的背景

II) フェビアン協会の成立事情

III) レッセ・フェールよりウエル・フェア社会へ

—R. オーエン, K. マルクスより S. ウェップへ—

序

本稿は、イギリス民主社会主義の福祉国家論の理論的かつ思想的基盤となっているフェビアン協会が、どのような事情のもとに生成し、いかなる構想を以って福祉国家を招致しようとしたかを、草創期のフェビアンとりわけ S. ウェップの思想を中心に考察しようとするものである。

I) 時代的背景

チャーティズム (Chartism) が終末を告げた1848年ごろから約30年の間のイギリスは、他のヨーロッパ諸国に先んじて産業革命を遂行し、工業製品の世界的供給の独占者となって「世界の工場」(workshop of the world) としての地位を確立し、以後、いわゆるヴィクトリア黄金時代 (Victorian Golden Age) を築いて繁栄したのであった。そして70年代にいたるまでの政治経済の基調は、産業ブルジョアジーを中心とするレッセ・フェールにおかれていたのである。もちろん

草創期のフェビアン協会に関する一考察

ん、この間に景気変動はあったが、全体としてみればイギリスの富の蓄積は確実に上昇していった⁽¹⁾のである。

しかし、このようなヴィクトリア朝の繁栄 (Victorian Prosperity) は、70年代の末年に近づくにつれて、繁栄の潮がしりぞきはじめ、80年代には継続的不況に見舞われるにいたった。輸出は減少し失業者が増加した⁽²⁾。かつてイギリスの産業界にみなぎっていた活気はしだいに衰退し、黄金時代に人びとがいただいていた無限の自動的な富と商業の進歩の幻想 (illusion) は崩れ去った⁽³⁾のである。

イギリス資本主義が、このように沈滞した原因としては、ヨーロッパ諸国およびアメリカ資本主義の発展である。イギリスに起った産業革命は20年代にはフランスに、50年代にはドイツに波及し、これら両国を中心とするヨーロッパ諸国の資本主義は、イタリアおよびドイツの民族統一を契機として、いちぢるしく発展し、80年代には帝国主義段階に入った。そうしてこれら諸国は保護貿易政策により排他的市場としての植民地と帝国の権力圏とを求めた⁽⁴⁾のである。とくに、19世紀末におけるドイツとアメリカ資本主義の発展はイギリスを凌駕するありさまであった⁽⁵⁾。

イギリス資本主義の独占的繁栄のゆき詰りについては、1870年～1890年にかけてのヨーロッパを襲来した不況 (depression) をも考慮しなければならないが、この不況の結果として各国の資本は集中され、いわゆる独占資本主義 (Monopoly Capitalism) の段階に入り、それは列強の帝国主義的競争を激化し、イギリス資本にたいする脅威を一段と強めることになった。

かくてイギリスの世界市場 (World Market) における独占的地位はゆらぎはじめ、黄金時代は終焉を告げ自由貿易主義の修正を余儀なくされるにいたった。イギリス資本主義が過去の甘い夢を追えなくなったいま、労働者はどのようになったであろうか。それまでの労働者は一般的には、かれらの主人とともにイギリスの繁栄を信じていた。そうして発展してゆく資本主義の枠のなかで、かれらの経済条件も年々いやが上にも富んでゆくものと考え、G.D.H. コールのいうように、かれらは金持ちのテーブルからますます多くのパン屑がほとんど自動的に落

草創期のフェビアン協会に関する一考察

ちてくるものと信じていた⁽⁶⁾のである。

しかし、かれらの期待も不況の襲来とともに崩壊し、深刻な苦境におこまれていった。不況は不況を呼び、それは燎原の火のごとく、イギリスの全土を覆い、大量の失業者を産み落していった。ストライキは踵を接して発生し、失業者のデモンストレーションは社会不安をかきたて経済的緊張が全国的に高まった。ハイド・パークやトラフェルガル・スクエアでは飢えた労働者が集会を開き、トーリー党 (Tory Party) の保護貿易論者が政府攻撃の氣勢をあげ、ハンガー・マーチ、教会へ向けての失業者のパレードが街を練り、工場地帯ではストライキとロックアウトの攻防がつづき、エキサイトしたデモ隊が警官隊と衝突するなど物情騒然とし、暗いニュースは紙面にみち、新聞雑誌には「社会問題」(the Social Problem) が大文字で示されていた。80年代のこのような社会情勢を背景にして、イギリス伝統のリベラルな急進主義は、ヨーロッパ大陸から入ってきたマルクス主義 (Marxism)⁽⁷⁾ 並びにアメリカから入ってきたヘンリー・ジョージ (Henry George) の土地改革思想⁽⁸⁾ とミックスされて、さまざまな社会主義グループを産み落していった。レッセ・フェールによる自然調節は、いまや幻想にすぎないことが分かり、自由主義は腹背に敵をうけることになった。フェビアン協会が生成したのは、まさにかかる時代的背景においてである。

注

- (1) ヴィクトリア繁栄期における1851年から1873年における顕著な一つの様相は、それがあらゆる階級におよび、この全期間を通じて、工業生産は年間平均3・4%の増加率を示し、未曾有の利潤を企業家に保障した。農村もこの好景気の分けまえに十分にあずかり地代は騰貴し、1850年～1870年間にイングランドおよびウェルズに広く散在した優良地の地代のごときは、1エーカー当り平均20シル6ペンスから24シルになった。また多くの地主は農業収入のほか、鉱業権や都市の膨脹からも増収を得、その結果、都市および農村の中間階級上層部は、その富と権力を増大し、工場や鉄道、およびその他の多くの形態での私的投資の増大にらんで、多数都市の富裕地域には、住宅や教会にたいする民間支出が目だっておこなわれた。労働者もまたこの産業進歩の分けまえにあずかり、賃金は物価騰貴に追隨することはできなかったが、一般に引き上げられ、貨幣賃金指数は、1850年～1874年の間に、平均約50%引き上げられている

草創期のフェビアン協会に関する一考察

- が、その間の物価騰貴を考慮にいれると、実質賃金の騰貴は、ほぼ30%と推定された。ともかく、労働階級は、1830年ないし1840年代に比較すれば、その生活状態ははるかに改善されていたのである。Briggs, Milton and Percy Jordan; *Economic History of England*, London. sixth ed. 1954. p. 526.
- (2) G.D.H. コールによれば、1872年に2億 5,600万ポンドに達したイギリスの輸出は、しだいに減退して、1879年には1億 9,200万ポンドに落ちた。労働組合の報告による失業は1%から12%近くまで上った。1878年は悪い年であり、1879年はさらに決定的に悪かった、と述べている。G.D.H. Cole; *A Short History of The British Working-Class Movement. 1789~1972—Vol. II 1848~1900—*p. 133. (G.D.H. コール「イギリス労働運動史(Ⅱ)」林, 河上, 嘉治訳 156頁)
- (3) G.D.H. Cole. *ibid.*, p. 135 (邦訳 160頁)
- (4) G.D.H. Cole. *ibid.* p. 136 (邦訳 161頁~162頁)
- (5) 列強の資本主義発展のイギリスとの比較については、L.C.A. ノールズ(Knowles)の *The Industrial and Commercial Revolution in Great Britain during the Nineteenth Century*, 1926. pp. 158~162 に詳しい。
- (6) G.D.H. Cole. *ibid.* p. 137 (邦訳 162頁)
- (7) マルクス主義はベルフォート・ボックス (Belfort Bax 1854~1926) や、H.M. ハイन्दマン (H.M. Hyndman 1842~1921) によって紹介された。とりわけ H.M. ハイन्दマンはマルクスの学説を基軸に「万人のための英国」(England for All, 1881) および「社会主義の歴史的根拠」(Historical Basis of Socialism, 1883) を著わし、マルクス主義の宣伝活動に努めたが、マルクス主義がイギリス社会主義運動、とりわけ労働運動に与えた影響はさほど大きくはなかった。それはイギリス人がヨーロッパ大陸のマルクス主義の唯物弁証法のような一元的教義をもって事物を解釈することには満足しないイギリス的思考があったために大した感化を与えることができなかったことと、そのほか、第一インターナショナルは海外からのスト破りの流入を阻止しイギリス労働者階級を助けたが、自由党はそれ以上の実益を与えていたという事情にもよる。H.J. Collins and C. Abramsky, *Karl Marx and the British Labour Movement*, 1965. Max Beer; *A History of British Socialism. Vol. II. London, 1919. pp. 227~230* 参照。
- (8) ヘンリー・ジョージ (Henry George. “Progress and Poverty”, 1879) の土地改革主義または土地公有思想は、土地私有による地主階級の不勞所得を敵視し、土地の公有化の必要を力説する。たまたまいギリスでは、18世紀末葉に T. スペンス (T. Spence), W. オグルヴィ (W. Ogilvie), T. ペイン (T. Paine) などによる土地公有論があり、また J.S. ミル (J.S. Mill, 1806~73) の地主の不勞所得論があり、さ

草創期のフェビアン協会に関する一考察

らに H. ジョージと時を同じくして A.R. ウォーレス (Alfred Russel Wallace, 1823~1913) が土地国有論を提唱するなど、イギリス自体にこの思想の素地は十分にあったが、1880年代の社会主義思想として土地公有論が徹底していなかったため、これから出発して、さらにこれを資本の問題にまで拡大する必要にせまられていたわけで、H. ジョージの思想はフェビアン協会の「土地」「資本」すなわち生産手段の公有化へ多大の影響を与えた。Max Beer; A History of British Socialism. Vol. II. London, 1919. pp. 237~245 参照。

なお、ヘンリー・ジョージの主張については、山崎義三郎「ヘンリー・ジョージの土地制度改革論」に詳しい。

Ⅱ) フェビアン協会の成立事情

フェビアン協会 (Fabian Society) の成立は、トーマス・ディヴィッドソン教授 (Prof. Thomas Davidson) の影響をうけた青年グループの集会である「新生活友の会」(Fellowship of the New Life) にさかのぼる。T. ディヴィッドソンはスコットランドの生れで、倫理学および教育学を専攻するアメリカ移住の学者であった。かれは自説を講演しながらヨーロッパ各地を旅行する、いわゆる「放浪学者」(wandering scholar) で⁽¹⁾、いたるところに感化を残したが、1882年9月ロンドンに滞在して、かれの New life——新しい道徳的真理に基づく簡素で相互扶助の理想郷——に関する講演をした。これを機にかれの思想を研究討論する集会が「Fellowship of the New Life」と呼ばれたのである。T. ディヴィッドソンの思想は、根本においては倫理的無政府主義共産主義者 (ethical anarchist communist) であり、すべての改善はつまるところ自己の改革 (self-reform) にありとする、いわゆる心的改造論者であった⁽²⁾。この Fellowship of the New Life は、愛他心と英知に立脚した理想社会を徐々に建設しようとするものであるが、およそ30名余のこれら青年ユートピアンの中には、のちにフェビアンの中心メンバーとなって活躍するフランク・ポドモア (Frank Podmore, 1856~1910)、エドワード・ピーズ (Edward R. Pease, 1857~1955)、ウィリアム・クラーク (William Clarke, 1852~1901)、ヒューバート・ブランド (Hubert Bland, 1856

草創期のフェビアン協会に関する一考察

～1914), ロバート・オウエンの孫娘デイル・オウエン (Dale Owen) や, 社会民主連盟 (Social Democratic Federation) の有力メンバーとなったヘンリー・チャンピオン (Henry H. Champion), J.L. ジョイス (J.L. Joynes) 等がいた⁽³⁾。

Fellowship of the New Life は第一回を, 1883年10月24日に開き, T. ディヴィッドソンの New life について討議し, ついで第二回を11月7日に開いてつぎのような決議を取りきめた。

『ここに作成された本会の終局の目的は, 最高の道徳可能性 (the highest moral possibilities) に合致せる社会の再建を為すにある。』⁽⁴⁾

この決議において目的を理想主義におくことを示した会は, さらに11月23日に, つぎのような決議を通過させた。

『現代自由競争の制度は, 多数者の苦痛を犠牲として少数者の幸福と快楽を保障するものであるから, 一般福利厚生を確保すべく社会は再組織されなければならない, と本会会員は主張するものである。』⁽⁵⁾

ここにおいてその目的の実現手段として, 現存社会のレッセ・フェールを基調とした自由競争制度にたいする批判に口を挿んだ Fellowship of the New Life は, さらに, 12月7日つぎのような, ふたたび理想主義の目的を強調した。

『 新生活友の会

目的——各人の完全なる品性の教養。

主義——物質を精神的なるものに従属せしむること。

同友——吾々同友の唯一にして必要なる条件は, 単純にして真摯に, 以上の目的と主義とにたいし強固な献身的たるべきこと。』⁽⁶⁾

しかるに1884年1月4日の会合において, このメンバーのうち, 社会主義の立場をとるものは, T. ディヴィッドソンの理想に共鳴しながらも, それを実現する方法について意見を異にし, この提案に賛成するものは少数で, ロバート・オウエン (Robert Owen) の自叙伝の著者として有名な F. ポドモア以下, E.R. ピーズ, H. ブランドの提議にかかるつぎの決議 (Resolution) を通過させて, こ

草創期のフェビアン協会に関する一考察

こにフェビアン協会 (Fabian Society) ははじめて成立したのである。

『決議第 1 本会をフェビアン協会と称す。

決議第 2 本会は目下の所では1883年11月23日の決議に含まるるより以上のものを、会員一致の基礎として強いることなし。

決議第 3 1883年11月7日の決議を修正して、社会の再建を為すにありとあるを社会の再建を助けんとするにありと改む。

決議第 4 此の方向に於ていかなる実際的手段を採るべきかを研究するため、本会は左のことを為す。云々』⁽⁷⁾

同会の結成と同時に発表された声明書 (Manifesto) の要旨は、つぎの通りである。

“The Fabians are associated for spreading the following opinions held by them and discussing their practical consequences.

That under existing circumstances wealth cannot be enjoyed without dishonour or foregone without misery.

That it is the duty of each member of the State to provide for his or her wants by his or her own Labour.

That a life interest in the Land and Capital of the nation is the birthright of every individual born within its confines and that access to this birthright should not depend upon the will of any private person other than the person seeking it.

That the most striking result of our present system of farming out the national Land and Capital to private persons has been the division of Society into hostile classes, with large appetites and no dinners at one extreme and large dinners and no appetites at the other.

That the practice of entrusting the Land of the nation to private persons in the hope that they will make the best of it has been discredited by the consistency with which they have made the worst of it; and that

Nationalisation of the Land in some form is a public duty. .

That the pretensions of Capitalism to encourage Invention and to distribute its benefits in the fairest way attainable, have been discredited by the experience of the nineteenth century.

That, under the existing system of leaving the National Industry to organise itself Competition has the effect of rendering adulteration, dishonest dealing and inhumanity compulsory.

That since Competition amongst producers admittedly secures to the public the most satisfactory products, the State should compete with all its might in every department of production.

That such restraints upon Free Competition as the penalties for infringing the Postal monopoly, and the withdrawal of workhouse and prison labour from the markets, should be abolished.

That no branch of Industry should be carried on at a profit by the central administration.

That the Public Revenue should be levied by a direct Tax; and that the central administration should have no legal power to hold back for the replenishment of the Public Treasury any portion of the proceeds of Industries administered by them.

That the State should compete with private individuals—especially with parents—in providing happy homes for children, so that every child may have a refuge from the tyranny or neglect of its natural custodians.

That Men no longer need special political privileges to protect them against Women, and that the sexes should henceforth enjoy equal political rights.

That no individual should enjoy any Privilege in consideration of se-

rvices rendered to the State by his or her parents or other relations.

That the State should secure a liberal education and an equal share in the National Industry to each of its units.

That the established Government has no more right to call itself the State than the smoke of London has to call itself the weather.

That we had rather face a Civil War than such another century of suffering as the present one has been.”⁽⁸⁾

以上のプロセスをたどるならば、Fellowship of the New Lifeは、重点をはじめは理想主義的人生の目標においたのであるが、徐々に目標実現の物質的条件に重きをおくようになり、やがて、この条件の実現を期するに、個人の自覚よりも組織の改造に着手するにいたってフェビアン協会は成立したのである。

フェビアン協会 (Fabian Society) のフェビアン (Fabian) という名称は、カルタゴを破ったローマの名将フェビウス・カンクトル (Fabius Cunctator) の忍耐と果敢に由来している。

すなわち『機の熟するまで諸君は待たねばならぬ。フェビウスがハンニバルと戦った時に、多くの人びとがかれの遅延を攻撃したにもかかわらず、最も忍耐して待ったように。しかしながら一たび時来れば諸君はフェビウスのしたように猛撃しなければならない。しからざれば諸君の隠忍は無益無効となるであろう。』⁽⁹⁾

このモットーはフェビアン協会の性格を如実にあらわすものである。

かくて、フェビアン協会は第一歩を踏み出したが、Fellowship of the New Life は分派として存置され、1889年の「フェビアン論集」(Fabian Essays) が発刊される年まで会合を継続された。

成立当時のフェビアン協会のメンバーは、きわめて少数で、その大部分は教師、ジャーナリスト、役人等のいわゆる「中産知識階級」(middle-class or bourgeois' intellectuals) から成っており、労働者ではペンキ職人の W.L. フィリップス (W.L. Phillips) 唯一人であった。因みに主要なメンバーをみるに、まず成立の生みの親である F.ポドモア (F. Podmore) はオックスフォード出身の郵便局

草創期のフェビアン協会に関する一考察

に勤める公務員で、同協会成立の会合にて数々の新決議案を提出して可決せしめ、またその議決の第一にあるフェビアン協会の名称はかれの創案による、オウエニズムで「ロバート・オウエンの自叙伝」を著わす。その友人のE.R. ピーズ (E.R. Pease) は協会創設の立役者で元証券のブローカーで、25年間協会の書記を勤め、のちに「The History of the Fabian Society, 1916」を著わす。成立から1911年まで協会の会計を勤めたH.ブランド (H. Bland) は銀行勤めの経験をもつ鋭敏なジャーナリストで、1884年1月4日の初会合では議長をつとめる。成立9カ月後にメンバーになったバーナード・ショウ (George Bernard Shaw, 1856~1950) はアイルランドの出身の新進作家で、1911年までの20年間、同協会の執行委員として、「フェビアン論集」「フェビアントラクト」の主筆として活躍する、かれはウェッブの有能な代弁者でもあり、フェビアンがイギリス社会主義思想上に有する大部分の意義は、かれに負うところが大きい。G.B. ショウの勤めで入会したシドニー・ウェッブ (Sidney Webb, 1859~1947) とシドニー・オリヴィエ (Sidney Olivier, 1859~1943) はともに植民省の役人仲間で、前者のS. ウェッブはロンドン大学に学び、1892年P. ヴェアトレスと結婚、フェビアン協会の理論的指導者として、フェビアニズムはウェッブニズムと同義語にされるほどあまりにも有名である、「フェビアントラクト」「フェビアン論集」また数多くの著書があり、フェビアンがイギリス社会思想上に占める大部分の意義は、主としてS. ウェッブによる。後者のS. オリヴィエはオックスフォード大学に学び、「フェビアン論集」に(社会主義の道徳的基礎)、並びに「フェビアントラクト」(第7「資本と土地」)を執筆する、のちに労働党のインド相となる。ヴェアトレス・ウェッブ夫人 (Mrs. Beatrice Webb, 1858~1943) は、従兄弟の夫チャールス・ブースの影響を受け結婚前から社会問題の研究家となる、「イギリス協同組合運動」(Beatrice Potter, The Co-operative Movement in Great Britain, 1891) を著わし、ウェッブと結婚後救貧法委員会の委員となり、「救貧法委員会少数派報告, 1909. ウェッブとの共著」を公表する。

グラハム・ウォラス (Graham Wallas, 1858~1932) はS. オリヴィエのオック

草創期のフェビアン協会に関する一考察

スフォード以来の友人で、J. ベンサムと J.S. ミルに傾倒し、ロンドン大学に新設されたスクール・オブ・エコノミックスの講師で、かれの著書「プレイス伝」はチャーティズムの研究に端緒を与えるものとして、イギリス社会運動史の研究に貢献する。A. ベサント女史 (Mrs. Annie Besant, 1847~1933) は急進的無神論者 (Secularism) ブラドロー (Bradlaugh) の協力者で、ロンドン急進主義の有能な闘士である、彼女は1885年以来フェビアン協会に属し、フェビアン論集に「社会主義下の産業, 1889」を発表する、ドッグ・ストライキに当っては、社会民主連盟 (S.D.F.) の面々と共に指導する。W. クラーク (William Clarke, 1852~1901) は、ケンブリッジ出身の急進主義者で「スペクテーター」(Spectator) 紙に健筆をふるうジャーナリスト等々であった⁽¹⁰⁾。

かれらは H. ジョージ, H.M. ハインドマン, J.S. ミルの経済学, その他の社会学派の影響を受けたさまざまなタイプから成っていたために、その思想上の信条は、はなはだ混沌としていた。かれらは社会主義を標榜しながら、なにが社会主義 (Socialism) であるか、それと無政府主義 (Anarchism) とがいかに関わるかなどの問題については、協会メンバー自身がまったく夢中であった。E.R. ピーズが、当時のわれわれは社会革命家に必然の要素である自己信頼に欠けていたと語っていることをもってしても、その真相をうかがい知ることができる⁽¹¹⁾。

ここにおいて、フェビアン協会は「街頭」の活動を H.M. ハインドマンの社会民主連盟 (S.D.F.) にゆずって、K. マルクス (K. Marx), ラッサール (Lassalle), プルードン (Proudhon) などの社会思想研究に、A. スミス (A. Smith), D. リカード (D. Ricardo), J.S. ミル (J.S. Mill), クリフ・レスリ (Cliffe Leslie), ケーアネス (Cairnes) の経済学説研究にと旧来の社会主義伝統から脱却して、新しい社会づくりに努力した。この研究および準備の期間は、1884年より「Tory Gold事件」を機に社会民主連盟 (S.D.F.) 並びに無政府主義と絶縁し⁽¹²⁾、フェビアン協会の綱領 (The Basis of the Fabian Society) が採択される1887年まで継続したといわれている⁽¹³⁾。

草創期のフェビアン協会に関する一考察

注

- (1) A.M. McBriar; *Fabian Socialism and English Politics, 1884~1918*. Cambridge 1966. p. 1.
- (2) Max Beer; *A History of British Socialism, Vol. II*. London. 1919. p. 274.
- (3) A.M. McBriar; *ibid.* p. 2.
- (4) E.R. Pease; *The History of the Fabian Society*. London. 1916. p. 31.
- (5) E.R. Pease; *ibid.* p. 32.
- (6) E.R. Pease; *ibid.* p. 32.
- (7) E.R. Pease; *ibid.* p. 34.
- (8) E.R. Pease; *ibid.* pp. 41~43.
- (9) E.R. Pease; *ibid.* p. 39. M. Beer; *ibid.* p. 274. A.M. McBriar; *ibid.* p. 9. M. ベアー, A.M. マックブライアーも E.R. ピーズの著書より引用したのであろう。
- (10) A.M. McBriar; *ibid.* pp. 3~7 参照。
M. Beer; *ibid.* p. 276 参照。
- (11) E.R. Pease; *ibid.* pp. 43~44.
- (12) 社会民主連盟 (S.D.F.) は、1885年の総選挙に2人の候補者をロンドンに立てたが、結果はそれぞれ20~30票ずつしかとれず惨めな敗北をした。のみならず、この2人の選挙費用がトーリー保守党からでていることが判明したために、フェビアンも社会主義者同盟 (S.L.) もひとしくこれを非難する決議をした。フェビアンの決議は、社会主義者の候補者の選挙費用を支払うために、トーリー党より金銭を受けとった S.D.F. 評議会の行為は、イギリス社会主義者の名誉を失墜するものである、と。この *Tory Gold* 事件は、フェビアンと S.D.F. との絶縁の機会となり、同時に思想的にはフェビアンとマルキシズムとの差別を明白に意識させる端緒となった。それらはさらに1年後のウィリアム・モリスのアナキズムとの絶縁ともなり、フェビアン議会同盟 (*Fabian Parliamentary League*) が成立した。このことは国家の存在を容認し議会政策を肯定したことで、アナキズムは協会内部において敗れたのである。G.B. Show; *The Fabian Society*, pp. 3~15. E.R. Pease; *The History of the Fabian Society*. London. 1916. p.p. 50~52 参照。
- (13) M. Beer; *ibid.* p. 275

Ⅲ) レッセ・フェールよりウエル・フェア社会へ

—R. オーエン, K. マルクスより S. ウェップへ—

以下はフェビアン協会 (Fabian Society) とりわけ S. ウェップを中心に、フェビアン社会主義 (Fabian Socialism) を明白に構成し、福祉社会実現への基礎づくりをなしてゆく過程 (1887年6月の綱領 “The Basis of the Fabian Society”) を、イギリス社会思想史の研究者 M. ベアーの著書 “Max Beer; A History of British Socialism, Vol. II, London, 1919” を援用して考察してゆくことにする。

フェビアン協会のメンバーは、S. ウェップの指導の下に、19世紀初期にあってゼレミー・ベンサム (Jeremy Bentham) とゼームス・ミル (James Mill) を首とする哲学的急進論者 (philosophical radicals) が、イギリス自由主義 (British liberalism) の台頭を指導したように、フェビアンもその指導によって、イギリス社会主義の興隆に貢献しようと努力した。哲学的急進論者たちは政党は結成しなかったが、かえって、それによって当時における改革運動と立法上に不滅なる影響を与えることができた。しからば、フェビアン協会員も同様の働きをなしえないという理由があるか⁽¹⁾。……R. オウエンが社会主義の宣伝に従事した当時は、労働階級はいまだ団結しておらず自己の勢力を自覚せず、かれらは大体において無教育な状態であった。国家は地主階級の寡頭政治であり、大衆の幸福とはなんら関係することのない圧制機関であり、戦争、警察および課税のための機関であった。福祉、改善、および社会的正義の性質を帯びているすべてのことは、国家の任務とは認められなかった。したがって議会運動も労働組合運動も無効であった⁽²⁾。……なぜならばそれは資産階級と治者階級とは団結して大衆に反対していたからである。資本、機械および軍隊は労働階級が、かれらの状態改良のためにするいかなる努力をも打破したからである。すなわち、人間はかれ自身の性格をつくるという誤謬のうえに基づいていた。けれども実際において人間の性格は境遇 (circumstances) によって決定されるものである。これらの境遇は私有

草創期のフェビアン協会に関する一考察

財産と自由競争とによって創造されたものであり、したがって社会的害悪に結果したのである。境遇の変化が必要であった。すなわち私有財産および自由競争より共産主義および協同主義 (co-operation) への変化が大切であった⁽³⁾。……K. マルクス (K. Marx) が実証科学 (positive science) によって武装せる社会主義を提示したときにおいては、労働階級はすでに団結し、政治上および経済上の解放のために社会の不法にたいして勇敢に闘争した。しかるに成年男子労働者は自由競争、需要供給、生存競争のなすがままに放任され、立法や労働条件を改善すべき直接の機能は与えられなかった。しかも富の非常なる蓄積と中流階級の政権獲得の時代において、かかるありさまであった。K. マルクスの学説は、激しい競争のもとにある経済生活、非民主的政治組織、互いに闘争階級に分裂した社会によってもたらされた諸状態の的確なる表現であった。しかるに1865年以来イギリスは変革の時代に入り、古い思想は退去し、労働階級は選挙権と労働組合法とを獲得した。個人的利益に基づく自由主義の思想は、社会改良にたいする国家および公共団体の集産主義的思想 (collectivist theory) に道を譲りつつあった。しかしながら、これらの変化はすべての人びとに明確に意識されていたわけではなかった。それは出来上った事実よりもむしろ傾向にすぎなかった。S. ウェップは、これらの傾向を看破して、みずから社会改良の任務を負う準備のある民主的国家 (Democratic State)、経済的、政治的に勢力を有する労働階級および社会的良心 (social conscience) にめざめつつある国民をもってすれば、社会主義は革命および階級闘争 (class struggle) の手段によらなくとも、しだいに実現できると確信した⁽⁴⁾。

それはマルキシズム (Marxism) からフェビアニズム (Fabianism) へ、すなわち社会革命の理論 (social revolutionary doctrine) から社会的実際 (social practice) への推移を意味する⁽⁵⁾。したがって社会主義者は特定の社会的害悪を研究し、社会主義の一般原則にしたがって、そのおのおのを矯正する方法を指摘し、それを国民に納得させるよう努力すべきである。社会主義者の使命は、経済的社会的生活のあらゆる部門における専門知識を獲得し、みずから立法ならび

草創期のフェビアン協会に関する一考察

に行政の機関に習熟し、かれらの知識と経験とによって、すべての政治機関の運用に当ることである。社会主義の実現は、国家が社会改良をとり入れ、雇用主が団体契約を承認し、国家および労働組合の干渉に服従した時点より開始されたのである⁽⁶⁾。……S. ウェップは、J.S. ミルの地代論に立脚している。かれは、J.S. ミルが土地制度改良以上に出なかつたかを論究し、それを資本の領域まで拡大してゆく。土地の位置 (position)、沃度 (fertility)、含有鉱物 (mineral contents)、単なる人間の存在などの要素が集って、一つの土地と他の土地との純利益の差をもたらし、それが、やがて経済的地代 (economic rent) の現象を生じたのである。現代の経済的攪乱をひき起したものは、この地代の法則 (law of rent) であった⁽⁷⁾。……工業においても、同一産業部門に働く労働者ひとり当りの生産高にはなほだしい差異が存在する。工場や商業事務所の敷地、発明発見の利用、原料および道具、組織および管理の形式などにおける差異が、この違いをもたらしたのであって、それは土地の性質の差異と同じものである。有利なる工場、商店のもつ便宜は産業上の賃貸料 (industrial rent) よりなっており、そのレントの大部分は不労所得 (unearned increment) である。資本家が享受するこれらの便宜は資本家がみずから努力した結果であるよりはむしろ社会の努力の結果であった。社会において勤労するすべての人びとが、この文化生活の発達、科学の功業、富の増大およびより有利なる組織形態に貢献した⁽⁸⁾。……したがって、土地および産業資本を個人的ならびに階級的所有から解放し、一般的福祉のためにそれらを社会 (community) に委託し、社会を再組織することである⁽⁹⁾。……そのばあいこれらの政策がなんらかの賠償を支払わずして実施さるべきである⁽¹⁰⁾。……なんとなれば、こうしてはじめてこれまでの不労所得であった地代および利子が労働の報酬に付加され、怠情なる階級は消滅し、実際上の機会均等は経済力の自発的行動によって維持され、個人の自由に干渉することが現制度によっておこなわれるよりもはるかに少いであろうからである⁽¹¹⁾。……そのばあい、生産物の分配 (distribution of the produce) がすべて平等の原則 (principle of equality) にしたがっておこなわれることを主張するのではなく、ただ、すべての労働者が

文化生活の最低限度を保証され (every worker should be guaranteed a minimum of civilised existence), さらに一層能力のあるものには能力のレントとして、より高い報酬が与えられなければならないからである。国民の社会的良心が、報酬の程度に関係なく、かれらの義務を遂行するにあまりあるほど発達しない間は、平等の分配は不可能である⁽¹²⁾。……あらゆる産業の社会化を要求するものではないが、社会的に操作されることが便利であるような産業資本の管理を共同体に移行できるように努めるべきである⁽¹³⁾。云々

以上の S. ウェップの主義、思想はそのままフェビアン協会の指導原理となつて、1887年6月3日の会合において採択された。

「The Basis of the Fabian Society」は、これを示している。

すなわち

“The Fabian Society consists of Socialists.

It therefore aims at the reorganisation of Society by the emancipation of Land and Industrial Capital from individual and class ownership, and the vesting of them in the community for the general benefit. In this way only can the natural and acquired advantages of the country be equitably shared by the whole people.

The Society accordingly works for the extinction of private property in Land and of the consequent individual appropriation, in the form of Rent, of the price paid for permission to use the earth, as well as for the advantages of superior soils and sites.

The Society, further, works for the transfer to the community of the administration of such industrial Capital as can conveniently be managed socially. For, owing to the monopoly of the means of production in the past, industrial inventions and the transformation of surplus income into Capital have mainly enriched the proprietary class, the worker being now dependent on that class for leave to earn a living.

If these measures be carried out, without compensation (though not without such relief to expropriated individuals as may seem fit to the community), Rent and Interest will be added to the reward of labour, the idle class now living on the labour of others will necessarily disappear, and practical equality of opportunity will be maintained by the spontaneous action of economic forces with much less interference with personal liberty than the present system entails.

For the attainment of these ends the Fabian Society looks to the spread of Socialist opinions, and the social and political changes consequent thereon, including the establishment of equal citizenship for men and women. It seeks to achieve these ends by the general dissemination of knowledge as to the relation between the individual and Society in its economic, ethical, and political aspects.”⁽¹⁴⁾

以上の原理によって明らかのように、フェビアン協会は、イギリスの伝統的な社会理論であるレッセ・フェールに反して意識的に新しい社会（福祉社会）、すなわち、「土地」「資本」の生産手段を排除して不労所得階級の特権を拒否し、所得の公平なる分配を求め、貧困を除去するために国家の活動を要請することを目的とするものであり、それはマルクス主義の公式理論である革命理論に溺れることなく漸進主義に基づいて⁽¹⁵⁾、福祉社会を実現しようとするものであった。

このような綱領（The Basis of the Fabian Society）の思想は、のちのウェッブ夫妻（Sidney and Beatrice Webb）による「救貧法委員会少数派報告」（The Break-up of the Poor Law: being Part One of the Minority Report of the Poor Law Commission, London, 1909）の提案となって、イギリスの社会保障制度に結実し、福祉国家の形成に大きな影響を与え、また「土地」「資本」のいわゆる生産手段の公有化思想は、紆余曲折はあったにせよ国有化計画の実現となって、労働党の福祉国家的政策の思想的かつ理論的基盤となっていることは周知の事実である。

草創期のフェビアン協会に関する一考察

以上のように、草創期のフェビアンがイギリス福祉国家の形成に果たした歴史的意義は、高く評価されても評価しすぎることはないであろう。

注

- (1) Max Beer; *A History of British Socialism*, Vol. II. London, 1919. p. 276.
- (2) M. Beer; *ibid.* pp. 277~278.
- (3) M. Beer; *ibid.* p. 278.
- (4) M. Beer; *ibid.* p. 279.
- (5) M. Beer; *ibid.* p. 279.
- (6) M. Beer; *ibid.* p. 280.
- (7) M. Beer; *ibid.* p. 281.
- (8) M. Beer; *ibid.* p. 282.
- (9) M. Beer; *ibid.* p. 286.
- (10) M. Beer; *ibid.* p. 286.
- (11) M. Beer; *ibid.* p. 286.
- (12) M. Beer; *ibid.* pp. 282~283.
- (13) M. Beer; *ibid.* p. 286.
- (14) E.R. Pease; *The History of the Fabian Society*, London, 1916, p. 284. Appendix II.

この綱領 (*The Basis of the Fabian Society*) は、フェビアン結成当時のいわゆる1884年の綱領からすると当初の「土地」公有論が拡大されて「資本」の領域までおよび、いわゆる「土地」と「資本」の生産手段の公有化を主張し、フェビアン社会主義が自からの立場を明白にした点は注目に値する。

なお、この綱領は Max Beer; *A History of British Socialism*, Vol. II. London, 1919. pp. 286~287 にも記載されている。

- (15) G.D.H. コールは「その理由は、フェビアン協会が終始その考え方の根本において非マルクス主義的であったからである。その経済理論はリカード、ミル、ジェボンズのたてた正統派の梯子の頂点に作られていた。……フェビアン主義者はマルクスの価値論を軽蔑でもってほねのけたのであった。そして唯物史観の表現としての階級闘争には全く興味をもっていなかった。なるほどフェビアン主義者の考え方もちろんマルクスのごとく社会進化の概念によるものであった。しかしその進化論はヘーゲルやマルクスからきたものではなく、ダーウィン、スペンサー、ハックリーに由来するものであった。それは漸進的継続的な過程として考えられ、破局的変革を含むものとしては考えられなかった。要するに、それは既存のイギリスの思考に根ざしたものであ

草創期のフェビアン協会に関する一考察

って、社会主義というものを革命的動乱の過程によるよりもむしろ、イギリスの諸制度および諸傾向を自然にかつ漸進的に発展せしめることによって生ぜしめられるものと考えていた。彼らは資本主義国家を粉碎せんとするものではなく、時代の要請に従って『福祉国家』に変えていこうとしたものである。」と述べている。

G.D.H. Cole; *A Short History of the British Working-Class Movement 1789~1927*—Vol. III. 1900~1927—p. 24. (G.D.H. コール「イギリス労働運動史(Ⅲ)」林, 河上, 嘉治訳 20頁~21頁)

なお, A.M. マックブライアーは「フェビアンの漸進主義は、かれらのいう『浸透』(permeation) という言葉に端的に表現される。それは80年代にフェビアンがかれらの政略を示すために使った言葉で、社会民主連盟(S.D.F.)の態度が狭量で非妥協的ドグマ的であり、粗野な宣伝活動をするのにたいし、フェビアンは協調精神を尊重し、社会主義の実現のために利用しうるあらゆる団体に接近し手をつないでいくことを意味する。」と述べている。

A.M. McBriar; *Fabian Socialism and English Politics, 1884~1918*. Cambridge 1966. p. 95.